巻頭エッセイ

## 俳 句の原点

事 須 民 惠

幹

橋も掛かっているし、 川。箒川が流れる川原の幅はかなり長く、鉄 て来る。ここは栃木県塩原温泉から流れる箒 として使用できた。まだ私が小学生の頃であ この川原を開墾して登録すると、 「ヤッホー」と呼べば 自動車道も通っている。 「ヤッホー」と返っ 自分の畑

父と私と弟は、

があれば川原に行き、

畑として使えるように

生えていて、春になると独活掘りに出かけた。また、植物の名前など 近くには清水の溜り場があって、蜆がたくさんいて川エビもいた。 済んだ。そこには必ずヤツメウナギの子がいて、 があった。そこから水がこんこんと出ていて、 特にじゃがいもは良く出来た。畑から百メートルくらい離れた所に崖 わ・・・。 と頑張った。だが所詮は川原である。 いろいろと父から教えてもらった。 また崖の下には土の固まりのような場所があり、 でも何とか畑らしくなり、 いろいろ野菜を育てたりした。 「これは川原のおばさんって言 石ばかりが出てくるわ出てくる 飲み水は持参しなくて よく観察していた。 山独活がたくさん

> ばさん」と言っていた。 かな? 後で調べたら翁草のことだった。周りの人たちも「川原のおうんだよ、ホラ頭が白髪だろう」「? ?」。そう言えば白髪に見える

どうかな? 中学校の校庭を見て初めて作句した。 らないままだったが、指を五・七・五と折ってみる。 味を持った。よし、やってみよう! ということで、季語とか全く知そんなある日、「子ども新聞」を見ていたら、俳句の欄があって興 うん、これなら

菊の香の におい満ちたり 青い空

こそ、古里への想いや、ありがたさが募る。栃木の俳句結社で新年句 私の背中を押してくれた。今は古里を離れているが、 のだ。これより私と俳句の付き合いが始まった。古里の自然な空気は れ替えた。そして発表。ジャジャーン、中村汀女先生の特選に入った モスでは香りが弱いし、空まで届きそうにもなかったので菊の香と入 れた言葉が今でも耳に残っている。 会に参加した。「俳句は座の文学、 を出してみた。 本当は校庭に咲いていたのはコスモスだったが、コス ここに座ったら皆平等」と挨拶さ 離れているから

目 次
俳句の原点 三須民惠1
コロナ禍の中で 2~4
諸家近詠 4~7
新会員・会友紹介 7
私の感銘句8~11
会員・会友の近況 ********** 8・9・16
津田沼研究句会報告12
青葉研究句会報告 12~13
柏研究句会報告 13~14
君津研究句会報告14
ひろば・掲示板 15~16

### 千葉県現代俳句協会

### $\Box$ ロナ禍 の 中 で

### 並 木 邑 人

ます。

崩壊は、後手後手政権の帰結でもあります。

者数の桁の違いにも次第に馴らされてきてい おり感染爆発は新たなフェーズに入り、

感染しても入院もできない各地の医療

本に秋波を送って強行した五輪。

怖れたと

時こそ協会を変えなくてはと思う人もいます。時こそ協会を変えなくではと思う人もいます。一方、こんなあるのかと考える人がいます。一方、こんな時に協会に会費を振り込んで何のメリットが立て問題はここからです。この二年間、俳さて問題はここからです。この二年間、俳 葉県現代俳句協会の復活を確かなものとする →更なる退会といった悪循環を裁ち切り、千金石となります。退会→財源不足→事業縮小次の吟行会、来年の俳句大会がこれらの試 散できるよう設定するというものです。 できるだけ簡略化し、これも午後の半日で解採点・表彰といった段階を踏んでいた順序を 散策して創作し、 る案を考えました。 せる。来賓も取止め、 日掛りではなく、 けばよいのではと考えてみました。 でも開催できる大会を、最初から計画しておは戦争状態と同様です。ならば如何なる状況 大会自体が開けないという事は、天変地異又 まず時間短縮。 皆様のご助力をお願いし 午後の半日で総てを終了さ懇親会も含めて夜までの一 昼食を摂り、選句・披講・ 同様に吟行会も、 実質的な俳句大会とす 午前中

# 三年 度秋の吟行会につい

①受付(十二時四十五分~) 参照してください。最重要点は左記の通りです。 行会」。同封のチラシ二枚(地図・申込書)をび致します。吟行の名目は「令和三年度秋の吟 (金) に行います。この間の紆余曲折につきお詫 投句締切(十三時十五分まで) 度吟行会を再延期し十月二十九日

④皆様全員に致めて多日を変で解散となります。③投句は嘱目二句。選句迄で解散となります。 2 参加者は各自で吟行。案内をJR船 欠席投句の方には会終了後、選句のため 方は今回、 いう場合に係までご連絡ください。 方は今回、申込み不要。今回は不参加と「春の吟行会」時、申し込みされている 作品集を送付。 郵送のため、若干遅れ 橋 駅

(5)

# 令和四年度俳句大会について

文

ることがありますので、ご了承ください。

したいと思い、兼題、一句持寄りで時間を短見えない中ですが、来年度こそは何とか開催日の俳句大会を、新型ウイルス感染の収束が のチラシをご覧ください。詳細は、「令和四年度俳句大会・作品募集」 ので、皆様のご参加をお待ちしております。縮して実施致します。当日は総会もあります す。奮ってのご投句をよろしくお願い致します。 句大会の事前投句の募集は、九月から始まりま また、 三月二十日に予定されている令和四年度 昨年・今年と続けて中止となった当 一句持寄りで時間を短 俳

## 未

う。友人の言である。 でもして上げようと思ったが、紙一枚ほどの る気配もない。だが、 競技が行われているが、コロナは一向に治ま で驚く。このごろの嬰は皆、育ちが早いと言 可愛さに「めろめろ」。四ヶ月頃から、私の ないのかも。だが、手元に居て育ってくると、 納得した。何でも経験しなければ理解が出来 を話してくれた時は、各々だろうと思ったが 距離を感じた曾孫の誕生。友人たちがその事 生まれ、私は元気な四人の曾孫に恵まれた。 中で昨年から、四人の孫にそれぞれ子どもが の様子はテレビ等で放映されている。 姿を見ると、キイキイ声を出して気を引くの 初孫が生まれた時には、この子の為なら何 催された。世界中の人々が集まり、 来のコロナ禍 競技は順調に進み、そ オリンピッ そんな

**曾**孫のこれからも平安に暮らせる世界が見え 楽しく、進化していく状態を見届けたら、孫、 代には感じたことのない物に触れている。 り行きで嬰らしくないのか。孫を見ていた時 が出来ることを願う。世界中の人々が喜び、 た。現在は月へ旅する時代が来て、自然な成 日も早くコロナ禍が去り、心置きなく競技 原始から人々は進化しながら時代を経て来 今後はパラリンピックも予定されている。

## リモート面

### 春 子

える。 力を抜く大切さをも教えてくれる。 しながら私に息を吹き込んでくれる。 が来た。自然は突き放したり、寄り添ったり たんぽぽと話をし、そして弥が上にもまた夏 覚え、わずかな冬日を追いかけるように歩き、 に戻れる時間をくれた。秋風に真底心細さを る。けれど、病院への往復一時間半が、自分 落ち窪んだ目の上の眉毛だけが堂々として見 白髪頭、肩あたりまでしか見えない服の柄。 トなのにマスクは着用したまま。目と眉毛と でのみ。コロナ禍での面会は厳しい。リモー なければならず、自分の脆さを思い知った。 の命の危機に直面し、その都度重い選択をし ビリが一年以上続いている。その間、何回か 感覚に陥った。わずかな望みを託してのリハ の説明を受けた。 機能障害を起こしており左半身不随となると ぐに救急車で運ばれるも、 面会は一回につき十分以内、勿論リモート 撫でたいが届かない。歯痒さだけが残 体が宙に浮いているような 時には

こと。

げられる? そしたら、こちらからもみえる よ。また来るね。バイバイの右手もう少し上 「お父さん、金婚式の記念品がもうすぐ届く

暫くして夫の右手の指先が画面に現れ、 そのまま目尻の涙を拭った。 バ

# ナ禍と学校

### 木 子

す。」とあり、はっとした。時間とは生きる 生きるということ、そのものなのです。そし ル・エンデの「モモ」。その中に「時間とは、 を振り返り「時間」について考えていた。 三月までの忙しい、忙しいと言っていた日々 て、人のいのちは心をすみかとしているので そんな時、読み返した本がある。ミヒャエ 定年退職し、時間が全て自分のものになり、

間や暇、 たのではないか。楽しさ、面白さなどには手 し、自粛する日々が続いている。その中で、コロナ禍に巻き込まれ、感染や予防対策を 大切さに気づかされた子どもも大人も多くい 何かにじっくり時間をかけて取り組むことの 時間が必要なのだと。

るような気がするからだ。 積であり、そこから才能や自信が生まれてく しい。大人になって残るのはそんな時間の蓄 くりと自分や相手に向き合う時間があってほ が必要だと思う。自分の時間を取り戻し、じっの先生や子どもにこそ、時間(余裕やゆとり) 忙しく、次から次へと対応を迫られる学校

える大人が、時間を惜しまず子どもたちに向けていく。とまることはない。その成長を支どんな状況であれ、子どもたちは成長し続 き合うことができれば、コロナ禍の去った後 が明るいものになると信じている。

## 口 ナ禍 の俳句と向き合う

コ

## 子

なった。 響で、年間半分位が止む無く゛通信句会゛と 会も、昨年と今年にかけては、コロナ禍の影 ることができた。和気藹々と持続して来た句 れでも十人前後を保ち、今年十五年目を迎え 後、会員は高齢・健康状態等により減少。そ と集まったのが、 同 .職であった人たちが俳句を学びたい 女性ばかりの十二人。その

参考になり、大変勉強になりました。の声が とめ全員に送付。会員からは、感想や所見は が、千葉現俳青葉句会などと同様、投句(三 多数寄せられた。 いての感想、意見等)の結果とコメントをま 句)→句稿一覧より選句(五句選と五句につ "通信句会、の方法はいろいろあると思う

## ◎コロナ下詠

人間の距離に影置く聖五月単病という見えぬ敵田水沸く 子供の居ぬ春の校庭真白なり コロナ下の孤独の電車うろこ雲 行く先の見えぬ行列マスクして 新緑の国道パトカーの孤独 薔薇の庭孤独を好しとして暮らす 世はコロナ騒ぎ真夜中の春雷 感染の疑心咳込むたび膨らむ 福助の棚に退屈春の塵 き 久 邦 啓 聰 栄 節 洋 孝 く 枝 子 枝 子 子 子 子 子 子

### 口 П ナ禍 の通勤と仕

### 育 也

時外して撮影しております。 だけは、立会者が確認できるようマスクを一 用が必須ですが、立会検査時の写真撮影の時 数を絞り対応しました。室内外でもマスク着 けるため、会議打合せ、 いるか確認し建築主に報告することです。 ごとの品質が設計図書のとおりに施工されて クポイントがあります。建設地に臨場し工程 で多岐に渡る工程があり、 この度のコロナ禍における仕事は三密を避 一設現場に行き品質管理 建物は基礎工事から内部の仕上げ工事ま 内容は現場監 及び立会検査等も人 一旦を担うことで それぞれにチェッ 一業務と言って、

たのを思い出します。 憩場の仕事をしておりましたが、現場近くの ク2020のボランティア活動の人たちの休 その時分、青山通りに面した東京オリンピッ 時差出勤をするよう指示がありました。丁度 「マツキヨ」にマスクを求める長い列が出来 通勤については、 会社側から混雑時を避け

され吟行もままならない状況です。 活動です。俳句界においても大会が中止延期 もとより文化芸術活動も規制を受けながらの 束の見通しが定かで有りません。経済活動は コロナ自粛の生活も二年に及びますが、 収

ワクチン接種が浸透し、 吟行が行われる事を祈念しております。 マスクなしでの句

# コロナウイルスに気づかされたこと

あります。 実地に見なければわからない。」というのが した。松下幸之助氏の格言に「真相は自分が の一大契機にできないものだろうかと考えま 誰も責任を取らない構図ではないだろうか。 緊急事態宣言、 員会はマスコミの報道を大いに参考にして、 ナウイルス専門委員会の提言に従い、 に露呈したのだと思います。 の実施を訴える。 ロナウイルスに因って、 二〇一九年十一月に武漢に発生した新型コ 恐れ多いですが、このコロナ禍を日本再生 まん延防止等重点措置の早期 知事はひたすら規制に頼る。 日本の危うさが如 政府は新型コロ

す。 です。 で口元を覆う。」ことで、そういう啓蒙を国 「一言発する場合でもマスク、ハンカチなど に赴いたのでしょうか。実地での気づきは、 民は待っていたと思います。 コロナウイルスのキーワードは、 コロナウイルス対策を執る責任者が実地 ここに注目することが肝要だと考えま 沫感染

た道を繰り返さない為にも、 その根幹に真理の探求があります。いつか来 物と対峙して、気づきや思いを表現します。 一つは、俳句であろうと考えます。俳句は万 この日本の危うい状況を正すことのできる 願うばかりです。 俳句文学の隆盛

※ 居酒屋・レストラン等

を

澄みわたる関宿城址ほととぎす 桜しべ乾ききったる水溜り 街騒をなだめるように黒揚 遠霞ヤマトザウルス浮遊して いて浮世を悟す春満

邓

三上

啓

もう海に浮かばぬ底曳船の秋 メトロの床に星の飾りの落ちる冬 虹立つやさよならはカフェオレ 花野揺れ易したましい触るる時 春だからひたすら乗る内房線 色

鳥雲に入るスクランブル交差点 桃の花舌でころがす変り玉 北国の風になじまぬ啄木忌 紅梅に影濃くなってゆく夕べ 相聞歌首を伸ばして亀鳴け

星野

惠

見開いて金魚の眠る爆心地今以て昭和の夜店這い回る にんげんが見えて来るまで草むしり 自分史の右半分は大枯野 遠泳の鰭の記憶を海とい う 谷 杜人

さっきからここにいる山茶花のように なんかいも生まれかわって黄落す 烏瓜遠くが見えてさびしかろ 文机にさくらひとひら待つように れぎわの明るさにい て葉鶏

足袋を干す身の内の卯浪きらめきて 田に水の張られ蛙の音の響 泥運ぶ嘴せはし初燕風音も鳶の笛も無き 一面の著莪の花その果ての 鳶の笛も無き花降る

海 き

水仙 !半透明の日の名

麦こがし一番に吹きだす少女

本 Ф Ź

飛花落花ゴールポストへ吸い込まる 木蓮の星ひとつぶを握りしめ (線花命をつなぐ距離のあり

矢野 忠男

ń

風見鶏もう七月の雨と風 青田風山気一気に動きけり 初つばめ田毎の水に捉えけ テーブルに蕾ほどいて月見草 懐に風を馴染ませ六月来

秋谷 菊野

虹

告白を聞く日傘ゆつくり 十薬の根深し母の一代記 親の家更地にするや立葵 回 る

人里に人声は無し枇杷熟るる  $\sqrt{}$ 河原清江 オートバイが置き去りにした青田

がか な

さらさらと一筆啓上聖五

月

失恋の話大好きかき氷

江戸切り子白玉に影奥座敷 白南風や数へつ唄ふ大漁節 八十路坂越え来て眩し朱夏の沖 風に浄化を恃む蟄居かな

> 山権 力のもどせばゆが :む捩花

里

福原

郁

法師子どもら息を太くせよ つ風の挽歌を肯えば

市電発

香港の詩人となってこの月を

骨の海を泳ぐか大陸まで

岡 田 淑子

下駄箱の中はいろいろ梅雨 行きちがいもあったね花のあす。ぺたぺたと七軒町の残り鴨 明ける か Ш

代る代る富士をながめて潮干 型を替えコロナは次の隣国

市 ΪĮ 唯 孑

阿鼻なくて蜘蛛の綴れる蜘蛛の糸 水草生うわたしは空へ行く途中ふらここの言霊映画より静か アナフィラキシー論金色の薔薇な の輪に詰める睡りのプライ バシー ħ ば

石﨑多寿子

二・二六は吾が生まれし日ぞ軍靴鳴る 雪激しドクトル・ジバゴラスト 胎 新の香や早春の朝刊は 動の予感やほうと草木萌 シーン

渡邉 竹 庵

神奈備を我が物顔にほととぎす 開校の空へ児の数ゴム風船 体に百の顔ばせ苔青 |明の揺るる読経や春の雷

銀漢や賢治の汽車は彼のあたり

秋尾 敏

田

春

人

しばらくは心に萩の花が散る 彼の人も満州生まれよなぐもり 擦れ違ふとき早春 大虚子も変異するコロナ禍の や春地球ではみな恋をする Ō に ほ 7 it 夏 n

ふとゆれる心の隣に海髪ひかる老狂やずかずかと蟻穴を出る 川風のわたしを完了とんぼう来よ Ш 中

黒とんぼあたらしき死者告げにくる ふたりで老う十薬の花まっ平ら

池 田 和 人

壕いまだ冥し沖縄慰霊の日その先は断崖といふ沖縄忌 天上の父とつながる二重虹 父の日のかの山いつも仰ぎけり 明日葉や明日吹く風を信じたし Ш 崎

聰

葉さくらを青しとおもう夕まぐれ 梅雨の月いつもの靴でみちのくへ あっけなくさくらがおわり石残る 卯波夕波モスクワに行けとい さくら見ておくこの世が遠くなる前に う

大澤ひろみ

亡くなれば皆好い人冬銀河 ギヤマンに表面張力新酒酌む 水平線丸みの有りて沖縄忌 登山靴脱げば夏炉の迎えけり がりに鬼を繋ぎて沈丁花

信号待ち背後に虹の太柱 ミレー見て甲府盆地の油照り 蜥蜴の尾姉のミシンの行方か 居ますから 時雨夕暮は確実に重 無風にゆ ħ る百  $\overline{\mathsf{H}}$ な 紅

石井

稔

櫂の背で割る一面の花筏 行く春やテイクアウトのピザ抱 花疲れみな横顔のままでをり

濡れてゐる傘は垂直春愁ひ

夜のクラリネットに手の

温

み

 $\overline{\mathbb{H}}$ 

博臣

な

牡丹の芽アンモナイトが目を覚ます 崩れゆく球体感覚ほたるの夜 跳びの止みていつしか寂光土 元或い は神の誤植か

輪

出 山 つばくらめ時を真二つ石舞台

スマホ繰るラインに走る大夕立 雨明 ?ける糊の利きたる綿シー ij

初蟬にパトカーの音重ね来る

黄のカンナ今年も背押す応援歌 のあの日正座の父の居て

池

 $\overline{\mathbb{H}}$ 

幸

誦

へ汗つやつやと孕み馬

出で立ちは孫より夫のメダカ捕り ペンギンと見たる花入れ被爆 瓶

継ぎ接ぎの堪忍袋梅雨晴間 天の川喜寿となりたる夫の臑 生きている日ごとに変わる氷かな

> 言をすぐに撤回梅雨の雷 雪淚となりて耳で読 む

> > 田芙美子

吉岡

.戸褄は昭 和の蛍永眠す 子

黒マスクアニメ男の夏帽 病を笑い勤める秋の蝶

山 

彩子

年の

日月早し去年今年

秋葉

紅

陽

さざなみの消えて現わる糸とん

ぼ

条の音なく光る距離の滝

河骨の一花を支え青い 籐寝椅子背中を海の 棹舟逝くや新樹の

空

風 風 は 走る 治海色に

山

田

邦

彦

林檎にも頰と云うもの児のなみだ鳴くことのみ思いし蟬かかの日来る 啓蟄や人の匂いにまだ触れ ちちははは円光の中蓬 ず

酔芙蓉どこかに黒衣いるような

手付かずの間合ひ過ぎたり虹 朝寒の新聞が来て動き出す 瞬きの先の三日月夕枯野

遠汽笛して一切が冬の中

石井紀美子

大量

一の蟻を見て来て胸さ

わ ぎ

山

中と

夕顔や男世帯の炊き音

1や詩 集 冊分の旅

//\

春

Ĥ

青 1重き山 いレモン遠きあの日の忘れも .河が動き出す雪 0 船

ギリギリまで我慢吹き込むゴム風 夜やオンザロックの音に酔う

> 千枚の青田吹きくる風の 全山を包む水音青嵐

原爆忌なんど打っても曲る釘

阿部さくら

生き急ぐみんみん蟬のぶつかり来

思い出

の近

ごづい

て来る余花

0 渞

大薗

新玉葱一皮むけし人あたり

人間の顔の貼りつく金魚玉 余生にも未来のありて白日傘

あ ゆうゆうと舟すべり出す天の あれこれの家事後廻し髪洗 大仏の窓よりのぞく土用波 の日からふたりはひとり小鳥来る 5  $\prod$ 

桃の皮つるりと剥けり話断つ 鈍色の空蒸し暑し人の列 瞑目す音は天空瀧千丈 薔薇散る散る足指小さくタクト とる

伊 藤 希 眸

寒晴や宅配でくる守り

コロナ奴を叱り飛ばして武具飾る 失意から勇気いただく連翹忌 メルケルを欲すこの国ただ寒

、カツメクサ父は異国に囚われ

田 耕 史

風死して前頭葉のまっさらに

吉

蚊遣香点す祇園の古燐寸 朴の花濡らし筑波の狐雨

上 野 紫泉

神田 頑張れとまた言はれても青胡桃 んげ [川風はさくらの声拾ふ んの 奥へおくへと野 火奔る

青空のあはひ蜘蛛の子散りつづく 逃げ水のなかに老人また老人

渡辺

澄

別れきて先ず手を洗う聖五月

っさいは見えぬ重さの初詣

大枯野百年を経て誰に会う マスクしてギリギリ近く空と海 ふるさとに残してきたる春夕焼

遠藤 寛子

見下ろせば水沫の数多ちび蛙

振り返る小さき複眼子蟷螂 真夜中に来る雷の思いやり 参観日サングラスした幼女来る

岩岡

:雨晴間肩の力を抜く素足

桜桃も各地銘菓も露店風

先生の点呼とどかず竹の秋 万緑の力借ります接種の日

折って拡げる沈黙の夾竹桃 巣籠りや地図で旅する色鉛筆

青山椒若者たちに期するもの 明易やレモンの花のはや匂 「サル学の現在」 枕に昼寝せり š

宇佐見房司

修司忌や馬は最後の坂のぼる 兜太の忌少し熱めの風呂がよ 国 [日重機のはがす家の梁 W

歳時記も俺もボロボロ雲の峰 避雷針みな天指してらいてう忌

大澤

重市

古釘の錆びて抜けぬや敗戦忌 あれこれを抱える両手古茶を飲む 会うたびに勾玉となる母合歓の花

冤罪はいつかはじける鳳仙花 新涼やじっと火を待つ登り窯

飯島

昭子

人の名の薔薇に囲まれ人恋し 透明の傘のひかりも夏めきぬ

手のひらに小さな命夏の虫

万緑の山を抱きて兄逝けり 雨あとの空軽くなる半夏かな

若林 佐嗣

新任地花の筏に迎えられ 黙食の刻の空っぽ春いずこ 天地に感謝の八十路野火けぶる

発車ベル銀漢行きの小海線 が むしゃらに昭和を生きて秋桜

横須賀洋子

これやこの自粛のかたち寒卵 七夕竹平和も不安と書く 八十の薄命もありももすも 幕引きの遠く近くに春の雷 令和というええわと応え五月なり t

東 國

人

蚊遣火の向こう側から鶴を折る 相槌を拒む檸檬と手を繋ぐ 絵葉書秘境蜻蛉は息を付く

多喜二の忌冷めて再び滾る白湯 語りつくして晩秋の本の森

木枯や不要不急の急ぎ足 村上

澄子

桐箱の古りしバリカン葱坊主 きさらぎの時短黙食昼の月 つちふるやおでこで計る体温 計

語り部のさわり百遍つくつくし

村

田

珠子

蜩や夕日ヘシャドーボクシング 小満の雨や海底世界地図 山は雪母の遺した刺繍 冬霧が包む一村一挿話 糸

ピカソよりマチスの自由小鳥来る

新 会 員 • 会友 紹 介

野 田市岩名 (推薦者 田村 秋尾 隆雄

秋立つと気楽に暦言うけれど 先が読めない青水無月の時刻表 梅雨の明けても東京が主語である

八千代市大和田新田 松村 五月 (会員

浪漫派のひとつの形鳥渡る蟻地獄見てそれからの私小説この世のものと思えば白く昼の (推薦者 月 山崎

三好美穂子

### の 感 銘 句

### 中嶋 私

北へ向く熱き腸鳥帰る 氏素姓それがどうした殿様蛙 すっぴんの冬満月に魅せられて はらはらと竹皮を脱ぐ自粛かな 北口に春が来ている待っている パンドラの箱開きて蒲公英の絮 空堀の奈落白蝶舞い上がる 初夢や龍が瓦礫を越えてくる ぼろ市のこんなところに侘びと寂び 大正の女将は聲で霧払う 國分 小野 山中 池田 村田 林 阿愚林 木之下みゆき 石井紀美子 未 葛子

北口に春が来ている待っている 冬は好きな季節ではない。 ひたすら春を待つ 石井紀美子

一箇月、といってもよい。

嬉しくなってくる。 いる」と畳みかけているのが効果的で、 春を感じている。しかも「来ている」「待って 作者は、冬の象徴のような、 共感の一句である。 駅の「北」口に 筆者も

## 杉山真佐子

霧吸うたび古墳らしくなる古墳 蛇衣を脱ぎおり電話鳴っており 向日葵の不安な明日という方位 トレモロとなり満天星の花となり いくたびも夏が過ぎ東京に川 反対に回す地球儀原爆忌 夕牡丹目を逸らしても重すぎる 昼顔にうすうすとある母系の血 石蹴りの石の行き先みな朧 「原爆の図」観てより髪の伸びる夏 渡辺 中村 坂間 栃木 木之下みゆき 加倉井允子 森井美惠子 國人 冬美 137 137 137 136 10 10 8 9 136 138 138 136 139 139 6 8 7 4

## 保 坂

冬瓜の何もせんでもいい形 菜の花の奥より復興縄電車 晩節の薔薇はもちろん真っ赤です 霧吸うたび古墳らしくなる古墳 枯蟷螂集合場所は秘密基地 行く春や明日解体の店眠る 向日葵の芯の三密ゴッホ展 夏蝶のいずこへ飛べぬ世の異変 嫌いでなくラブラブでなく根深汁 石蹴りの石の行き先みな 岡田 加藤 Ш 木之下みゆき 佐藤美紀江 岡田芙美子 石井紀美子 山中とみ子 淑子 政江 きよ

138 137 137 4 9 8

136 136 9

10

136

8

号

## 袴田

139 7 139 6 138 6 138 4

さくらさくらどこかが歪む空があ 信濃路に春が来て先生の家 ぼろ市のこんなところに侘びと寂び 大正の女将は聲で霧払う 青野行くいつも心に捕虫網 北へ向く熱き腸鳥帰る 葬ること叶わず夕立地を叩く 海見たくなりぬ林檎を真っ二つ 千歳飴握りこれより一代記 海市への方舟を待つ老人A 塩野谷 椎名 門谷 上杉 Ш 木之下みゆき 中とみ子 良身 鳳人 杜人

139 139 138 138 137 137 136 136 136 7 5 6 4 10 10 9 8 7

風呂敷の包む好日桜東風 クローン桜百年説を生きる道 たぶん死は冬のさくらのやうにくる 夕焼に明日が見えて鎌を研ぐ 石蹴りの石の行き先みな朧 青鷺の飛翔一気に水温む 関谷ひろ子 増田 直江 森 ふみ子 佐嗣 元子 裕子 きよ 138 137 137 136 136 136

11 9 11 8

と思い自分を励ましています。

(阿部さくら)

コロナにも猛暑にも負けず生きるのが仕事

、定邸吟行など思い出します。

7

# 《会員・会友の近況》

(1)

六月から通常の句会が開けるようになり喜 外を向く情熱を失っているとき、待ってい どこにも出掛けられない日々ですが、 で笑える日が来ますように。(柳本 なりました。 と句会は続けております。 んでいましたが、また怪しい。(矢野 一日も早く手を取り、マスクを外し、 てくれたのは俳句でした。皆様に会いたく ゆみ) 文子)

うで、想い出に生きています。 暑くなりました。九十五歳も過ぎ俳句の友 達もみんなあの世。どこもなんともないそ 何とも味気ない。代案のラジオ体操に参加 コロナ禍で地域の花火大会や盆踊りが中止。 人と会うと脳に良いとか。 するつもり。一日に家族以外の五人以上の (秋谷 (岡田 淑子)

昨年は長年の会員として感謝状を戴き恐縮 コロナの影響、無観客での五輪と心の晴れ ワクチン二度接種二週間経過後、青葉句会 ない毎日ですが、希望をなくすことなく一 なくなりました。八十半ばとなり、手賀沼や 行会など楽しみにしておりましたが、 に存じます。 日一日を大切に過ごしたい。(岡山 はまだまだ予断を許しません。 の新規感染者大幅に増加。コロナとの闘い に参加。高齢者感染が減少する中、 かつては新春句会や近隣の吟 (池田 敦子) 若中年 博臣)

139

7

 切株に影の屈折敗戦忌
 近藤 栄治 139 7

 母はもう鶴折るばかり星月夜
 加藤 法子 138 6

 敗戦忌抜いて青春語れない
 加倉井允子 138 6

### 岡 尚子

かたちばかりの老の体操小鳥くる それぞれに葱立てているレジの列 ひとひねりしてあるパスタ春の宵 大西日湖の水面の歩けさう 秋晴れがブルーシートに見えてくる 爪赤き人に売るたけのこひとつ 曲り家の暗がりに脱ぐ夏帽子 かたちばかりの老の体操小鳥くる 冬眠の木々に大きな耳がある 三越でケーキを買った広島忌 言葉にも後ろ髪あり風の盆 馬渕 小林 小野 石井 黒澤 岡田 秋谷 村田 津枝 裕文 実 139 5 139 5 138 6 138 5 138 5 137 137 10 9 136 137 136 8 10 9

思わずクスリ! 娘に教えられ私も少し体を動かしてはいるが、傍から見れば真に「かたち満足のみなのだ。作者の一生懸命の体操に「小満足のみなのだ。作者の一生懸命の体操に「小調でも減ずる為に楽しく頑張ろうとハッパを掛けるでも減ずる為に楽しく頑張ろうとハッパを掛けるでも減ずる為に楽しく頑張ろうとハッパを掛けるが、傍から見れば真に「かたち動かしてはいるが、傍から見れば真に「かたち動かしてはいるが、傍から見れば真に「かたち

## が 津村

秋晴れがブルーシートに見えてくる東國人37 10自分史の舌出している曝書かな徳吉洋二郎136 10たぶん死は冬のさくらのやうにくる直江裕子138 813 1013 10

あじさいの笑いの音符はひふへほ 晩節の薔薇はもちろん真っ赤です 骨太を褒められ壷に入る晩秋 死はとちゅう白さるすべり吹雪く 転んでもこの道をゆく花吹雪 着ぶくれて夫の反骨薄れ け 菊地 越野 坂間 小野 Ш 京子 139 138 138 137 137 5 6 6 11 10 139 7

## 野葉子

穴まどひひそかに昏く世の狂気 来し方に筋書は無し根深汁 身内てふ緩き繋がり石蕗の花 笹鳴や肩の力を少し抜く 雪柳柔順のみでは生きられぬ 年用意鶴折るごとく時畳む 無言と言う圧力あるや月白し 幸せの黄色い香り柚子の風呂 ほどほどの省略人生風かおる 人の名の忘れ易きや猫じやらし 中村 福田· 戸邉 小張 片岡伊つ美 飯島 坂本千惠子 冨 田 [志津子 佐嗣 昭子 茂 139 139 138 138 138 137 137 136 136 136 7 6 6 9 8 9 7 7 4 4

## 小井 奈々

難さは時、

暮らしていますか。私は今ほど、〈惜むべし得

逢い難さは友なるべし〉の、西

氏素姓それがどうした殿様蛙 どんぐりころころ君はもう青年 すっぴんの冬満月に魅せられて 耕して耕して父土となる 日脚伸ぶ家のどこかがふいに鳴る ふくろうの鳴くたび月が熟れてゆ 斧始地球もっとも膨らめ 花野より戻るランプを置き忘れ 長き夜ルーペのなかの鬱の文字 梅を干し己が仕舞い方を忘る ń 國分 里見 加藤 小野 若林 塩野谷 小川トシ子 永井アイ子 羽村美和子 佐嗣 信子 さち 139 139 139 138 138 137 136 136 5 5 5 6 6 9 10 8 139 136 8

り、心さみしく過ごしています。 
の 日には煉瓦塀の目地を大行進という程 
市の日には煉瓦塀の目地を大行進という程 
市の日には煉瓦塀の目地を大行進という程 
市の日には煉瓦塀の目地を大行進という程 
の 日の我家の庭には蝸牛が沢山いて、

・自粛生活の中、今は鬼籍に入られた先生方の句集を読み返しながら昭和時代を懐かしんでいます。俳句を続けている幸せを実感しています。俳句を続けている幸せを実感しています。俳句を続けている幸せを実感しています。

・みなさま、お元気ですか。「安全・安心」に家庭菜園に挑戦中。(吉田 耕史) マのどこに居たのか。調査依頼し、ようやアのどこに居たのか。調査依頼し、ようやアのどこに居たのか。調査依頼し、ようやアのどは昭和十七年召集され満州で囚われ・私の父は昭和十七年召集され満州で囚われ・私の父は昭和十七年召集され満州で囚われ

のに目を向け作句しています。(飯島 昭子) ・コロナ禍、よく見たり、よく考えたりする時間が増えました。それまで少なかった句作数が結構ふえました。質はさておき)コロナ禍が良い作用をもたらすこともありますね。皆様健康第一で。 (遠藤 寛子)すね。皆様健康第一で。 (遠藤 寛子)すね。皆様健康第一で。 (遠藤 寛子)で会は再開されたものの句会後のお茶、おしゃべりができず消化不良気味。身近なも、といます。(渡辺 澄)

## 﨑

、も出ぬほど淋しいぞ浮

いて来

千葉

信

葬ること叶わず夕立地を叩く 蜻蛉消え青空のまた深くなる 夏の空干潟の蟹は皆笑う 小鳥来る伝言板の残る駅 菜の花の奥より復興縄電車 秋晴れがブルーシートに見えてくる 春日傘ながれるごとし百三段 瓜坊に消化不良なり平成 神話の扉開きそう春の山 椎名 宮下 塩野谷 遠藤 並木 羽村美和子 小野富美子 石井紀美子 鳳人 奈緒 139 5 138 7 139 138 138 137 136 136 136 136 7 6 4 10 10 8 8

休校で潮目が変わる金盞花 花の風篤姫なごりの御座所かな あぢさゐは残像といふさう思ふ はらはらと竹皮を脱ぐ自粛かな -かけて孤独死ではない梅 輪 岡山 伊藤 Ш 横 木之下みゆき 中 須賀洋子 葛子 希眸

父の背に諭され仰ぐ小望月 まんさくのぬくもりほどでよろしい ポスターの名画の女と冬に入る 桃の花生後十日を抱きしめる 死はとちゅう白さるすべり吹雪く 縁側の昭和向きたる籐寝椅子 吾輩は恋猫であるまだ八十 桃の花生後十日を抱きしめる 冬銀河定員ひとりの舟が出る 福寿草余生の夢を育てをり ふくろうの鳴くたび月が熟れてゆく 坂間 久保 広瀬 増田 保坂 中澤 吉岡 羽村美和子 直 田 江 末子 筑峯 悌子 元子 ゆ  $\equiv$ 139 138 138 137 136 136 136 136 136 136 4 8 6 9 9 8 8 5 11

胸が熱くなりました。

松岡 馬渕

137 137

林

Ф

み

林

阿愚林

136 136 136

ている。 う。 ″生後十日を抱きしめる ″ これ以上の言葉 こからは、 U を過不足なくサラッと表現。お見事です。そ 要りません。 生まれて間もない嬰児を抱きしめた、その喜 桃の花とあるので多分お嬢ちゃんでしょ 作者の言葉では表わせない情愛が迸っ 情景が目に浮かびます。

## 8

136

切株に影の屈折敗戦忌 来し方を丸ごと齧る冬りんご 花魁の如き金魚と目が合いぬ 春の別れ乳房のようなマスクたち 菜の花を上手に乗せる口車 新聞と西日配ってゆくバイク かき氷初めて月に降りしこと 陽炎をすくってみたら父と母 初夢や龍が瓦礫を越えてくる おもしろい老婆になろう猿酒

近藤

栄治

139 138 138 138 137

7 6 5 4 9 8 8 10 10 8

片岡 山中 村上 村田

釈迦牟尼の耳朶の厚さよ秋 春月に届くロープを買いに行く たぶん死は冬のさくらのやうにくる 遠くから隕石畑から胡蝶 風 直江 中嶋 野 檜 П 垣 裕子 京子 梧 137 136 136 136 8 8 7 7

新しき靴の一

歩が落葉踏む

Ш

夕紀

11 9 10 8

ため息をさらりと解毒蜆汁 たくさんの廻り道して花の中 湯豆腐や摑み損ねるイエスマン まんさくのぬくもりほどでよろしいの

馬渕

137 137 136 136

元橋 直江

孝之

村上

冬瓜の何もせんでもいい 初夢や翼になった二本杖 こいのぼり窓も扉もあけて留守 迫りくる百歳の飢餓冬ぼ 球 が背中を歩く原爆忌 形

138 138 138

4

139 139

7 5 5 4

枯蟷螂集合場所は秘密基地 たん 小野 加藤 菊地 坂本千 佐藤美紀江 谷 裕文 法子 京子 惠子 菊野 139 139 138 138 138 137 5 6 6 4 9

5

林

8

ボレロに弾む秋光の談話室 北へ向く熱き腸鳥帰る 帰心とは春の改札通る時 初夏の自粛太陽がいっぱい 賢治読む冬の時間をふと止めて 桃の花生後十日を抱きしめる 老老の静かな看取り龍の玉 ここからも故郷からも寒の月 百歳のまなざし母の淑気かな 生き生きと生きて小吉吊し雛 小林 山﨑 柳本 山崎 増田 保坂 栃木 多胡たかし 木之下みゆき 俊子 幸子 ゆみ 公子 末子 きよ 元子 139 139 137 137 137 136 136 136 136 136 7 7 10 10 9 11 11 9 9 7

## 山中

咳こぼさじとアーバンパークライン 神かけて孤独死ではない梅一輪 生きて出ることなき病院帰り花 自粛から出て回遊魚の青い 八月の凶事火の入る中華鍋 断念のバッハー夜の花ごろも 春風と見えぬウイルスごっちゃまぜ いくつもの総の綻び野火走る 冬桜行方不明の鬼はここ /焼へ合掌・人を人怖れ 秋 小林 加藤 菊地 吉岡 横須賀洋子 Ш 東 木之下みゆき 羽村美和子 中 鳳人 俊子 法子 京子 賴子 國人 139 139 139 138 138 138 138 137 137 136 7 4 7 4 11 10

## 川上典子

霧吸うたび古墳らしくなる古墳 山門の一段ごとに秋の雨 桑の実や愛称で呼びあふ二人 晩節の薔薇はもちろん真っ赤です やわらかな鳩の空あり風光る 賢治読む冬の時間をふと止めて 桃の花生後十日を抱きしめる 寝静まる街を見巡る雪兎 幸せの黄色い香り柚子の 点描の小雨にけぶる冬もみじ 通 宮 岡田 倉岡 山﨑 山崎 増田 長井 木之下みゆき 島 隆史 けい 政江 茂 139 139 138 136 136 136  $137 \ \ 137 \ \ 137 \ \ 136$ 7 7 5 11 11 9 11 11 8

## 津髙里永子

枯菊を焚くやチェンバロ鳴るごとし 隕石のかけら転がる秋旱 杏の実重なり落ちて肺を病む 枯菊を焚くやチェンバロ鳴るごとし 風船蔓いしいももこの本開く 冬瓜の何もせんでもいい形 背景はときに透明梨の花 ねぢ花の半回転や明日も暇 いっぽんの釘に影ある春の昼 ちぢむ肉体マスクの掛かりにくい耳 大西日湖の水面の歩けさう 佐藤 佐藤 佐藤 佐藤 石井 岡田 加藤 上野 中 鈴子 禎子 紫泉 139 7 139 7 139 138 138 138 139 138 138 138 6 5 6 6 5 5 4 4

視覚的にも枯菊の焚かれていくようすを適確にひびきあっているように感じた。音だけでなく、の中に白いキーのあるチェンバロと枯菊の趣がの来に白いながはくなっていたであろう。黒いキーて黒鍵部分が白くなっている。掲句、枯菊とはて黒変部分が白くなっているのり鍵部分が黒く

つきてしまうのだ。は反抗の音を立てながら、あっという間に燃えれるようなことがあったら、枯菊のように一瞬表わしてあると思う。もし、チェンバロが焼か

### 29賀洋子

それぞれに葱立てているレジの列 来し方を丸ごと齧る冬りんご 野十郎の 嘘もついた煮え湯も飲んだ冬の薔薇 まんさくのぬくもりほどでよろしいの ほととぎす妻大鼻を在所とす 野十郎の「蝋燭」逼る緑の夜 ビー玉の中に満月持ち帰る 浅蜊貝水から水へひきこもり 病気持ち三人並ぶ小春かな 九条つて葱のことだといふ話 「蝋燭」逼る緑の夜 門谷 小野 久保 門谷 秋谷 山中 伊与田すみ 宮本美津江 五味ちひろ 裕文 菊野 杜人 筑峯 葛子 梧樓 139 139 138 138 138 137 137 136 5 4 6 4 4 11 9 10 136 136 8 7 10

大談月は切なくも懐かしい。 一次に動板一枚に一本ずつの「蝋燭」十四・大談月は切なくも懐かしい。 一次で、掲句の「蝋燭」の炎に焙り出された。中空にかかる「月」は深い緑の闇に囲まれている。その多くが制作年未詳。不思議な魅れている。その高島野十郎展。共に通った友人もが終る前年の高島野十郎展。共に通った友人もが終る前年の高島野十郎展。共に通った友人もで談りは切なくも懐かしい。

## 悩けい

疑惑の水際わらわらと花衣 荒木 洋子 137 9 冬銀河定員ひとりの舟が出る 保坂 末子 136 9 蒼白き骨片風の冬かもめ 細根 栞 136 9

ちぢむ肉体マスクの掛かりにくい耳 冬薔薇の赤きを摑む鉄格子 鋭角に夏の残照私小説 不死鳥と言われるなんて曼珠沙華 い母音運河にひろう白秋忌 島田 澤田 興津 菊地 中 翠松 恭子 葛子 138 138 138 139 139 6 7 6

### 一岡伊つ美

休校で潮目が変わる金盞花

木之下みゆき

139

ぼろ市のこんなところに侘びと寂び いっぽんの釘に影ある春の尽 晩節の薔薇はもちろん真っ赤です 来し方の四角三角おでん鍋 時計みな走り出したる十二月 初湯出て四股踏んでみる卒寿かな 夏シャツに皺どこまでも戦中派 初雀令和の螺子を巻き直す 夕焼に明日が見えて鎌を研ぐ 人日や影にもありぬ裏表 黒澤 門谷 山﨑 相原 前田 若林 馬渕 細根 佐久間 徳吉洋二郎 孝子 佐嗣 津枝 買城 雅代 杜人 政江 一枝 138 138 137 137 137 137 136 5 4 11 10 9 9 10 139 136 136 6

## 近藤 幸子

はらはらと竹皮を脱ぐ自粛かな 耕して耕して父土となる 年用意鶴折るごとく時畳む 越後三山崩るるごとし大白鳥 時計みな走り出したる十二月 夕空へ糸伝ふごと螢とぶ いっぽんの釘に影ある春の昼 父に戦後風鈴吊す廊下か 『側の昭和向きたる籐寝椅子 党 か消え青空のまた深くなる な 佐藤 塩野谷 久保 伊藤 門谷 山中 長井 馬渕 希眸 杜人 葛子 博子 津枝 139 138 138 138 137 137 136 136 139 138 5 5 4 4 9 8 11

# □□ 津田沼研究句会報告 □□

●第三四四回(令和三年五月十一日)

初夏の風 黙然と木太刀の反りや樫若葉 哲学してる筑波嶺のがまがえる ほろ苦き飛び入りの皿春の夕 朝なさな受胎告知の豆の花 薔薇園や王妃王女にとりまかる 幕引きの近くて遠き春の雷 たんぽぽの絮を飛ばして家出 つつじ燃ゆ隣の席はダメですよ 春の旅手巻きラジオを枕上 青葉若葉いずれゆうべの髑髏 藤の花疫病神のまだ在ます [襞にしづかなるもの藤の花 位牌の字体同じにす 中 並木 股野 栗原 竹田 星野 池田 高木 徳吉洋二郎 伊与田すみ なかもと淑子 横須賀洋子 博臣 邑人 彩子 正子 久子 一惠 恵

# 第三四五回(令和三年六月八日)

花あやめ 新じゃがのレシピ記憶の彼方より 青年もすなる化粧や夕顔別当 関節のエクササイズ梅雨入り待ち 白寿まで百のいのちの仕舞い方 戦碑の小文字びっしり青葉騒 風薫る一切合財もう要らぬ 線知らぬ反抗期 暗渠の上の川筋に 通信句会 担当 筋から啜る 徳吉洋二 村上 竹田 なかもと淑子 横須賀洋子 郎 彩子 久子 邑人 豊子 博臣 澄子

> シュレッダーにかける短冊さみだるる 春の椅 逃げ水や心の澱の行きどころ 瓶とざる四 海老川のそぞろ歩きよ青蜥蜴 か夜と背中合わせの昭和かな .子どんすの柄で王下に つずつあり梅 を待 つ 栗原 星野 伊与田すみ 徳吉洋二郎 白 暢子 正子 惠

# 9三四六回(令和三年七月十三日)(於:津田沼一丁目町会会館)

徳吉洋二郎

半夏生ワクチン痕のむず痒 モノクロのフラッシュバック蛍の夜 つつましく手堅きくらし茄子の花 我々は我とあなたと蓮の花 七夕竹おり姫ひこ星ほかに無し 男物傘捨て涼やかな土間 ガラス器の静かの海へ水羊羹 ペンを持つ梅雨の重さの加わりて 山津波人知及ばず流れ海 手捻りの皿に若鮎父の忌よ 田水張る上意下達の千枚田 直角にワクチン接種半夏生 手櫛ならきっと頷く青すすき 彩雲や知のさまよへる夕端居 、ューリップワイングラスになっていた 並木 村上 高木 栗原 伊与 徳吉洋二 白木 股 なかもと淑子 横須賀洋子 田すみ 暢子 博臣 正子 彩子 澄子 邑人 恵

# □□ 青葉研究句会報告 □□

降りしきるもの纏う暮春のすべり台 長濵 聰子●第一一六回(令和三年四月二十二日)

揺れるさま浮かびてひじき恐ろしき 夜降ちの雨満天星の花あかり遅き日や昔の文庫文字小さし 地下鉄に出口入口春セーター 春の月土偶の乳房点となり 声破ける鉢底宿とする蟇に 茶葉の来て町は戦場新茶の 真夜中の高速道路を雪解川 コンビニへ夢を探しに春帽子 髪切って五月の風 蟇穴を出る曝け出したら恥部じゃない 春宵や可杯盆に友の声 近況はいつも綺麗に燕来る 徒広い下界にささる栃の花 巣籠りのままに身罷り晴れの日 栄一も弥太郎もいて桜餅 ひきがえる昭 **男定用重機カラーコーンの警備陣** 和平和引きずっ のみどり 香 色 栗原 長井 矢野 鈴木まんぼう 細野 一敏 辻本喜代志 越野 山﨑 並木 三須 池田 石井紀美子 加賀谷秀男 森井美惠子 洋二郎 郁子 幸子 雄治 民惠

# ●第一一七回(令和三年五月二十七日)

予期せずに不意に来る老い 綿津見へきらめき返し大赤鱝 ほとぼりが醒めて五月の 白牡丹おのが心に違反して カラヤンの指揮孑孑のフラダンス コロナワクチン梅雨寒の瓶の フーコーの振子の軌跡セロリ噛む 薔薇の前写真になった少女B 通信句会 担当 海 杜若 汚す 頸 矢野 長濵 山﨑 越野 小林 鈴木まんぼう 細野 池田 石井紀美子 忠男 幸子 一敏 雄治 聰子 博臣 実

否応も無く命数や栗の花

春愁とは恰好が良いがただのいねむり

吉野

女を生きてレモンスカッシュなとき

加賀谷秀男

十字架を蹴り炎天へ打ってでる 暗峠のそのまた奥の夏の果 夏の川近視のメガネ屈折す 天国に召される時の薔薇枕 国破れて山河ありとや籐寝椅子

決心の後の黙り白い靴 春の昼給油の音に戦慄す 嘘つきの 睨む百合子青時雨に他出 先帝祭押され押されて最 五月晴四角四面の工事の音 女子高に囲すユッカ剣の葉 肩並ぶ並ばぬ夫婦麦の秋 濃紫陽花白鳥そっと寄ってくる 路出づ代田に一本夕日射す 活和で手酌晩年のこころざし 種を延々虎つぐみ 前線 吉野 横山 栗原 加賀谷秀男 森井美惠子 辻本喜代志 民惠 忠男 法子 邑人 正子 郁子 精

守宮の子誰にでもある氏素性

(於:千葉市民会館)

一一八回(令和三年六月二十 司会 徳吉洋二郎 应 日

父の日の遺影の父のメガネ拭く やどり木へしずかに移る夏の霧 枇杷熟るる夜を帰り来て灯をともす やせました蓮のうてなに乗るつもり 酔いどれ 唐突に一人にされし夕立かな 永平寺より賜りし蟬の殼 端居して急に行く末などと言う マゾですか野薊の針また触れて と呟きながら油蟬脱皮 の老いの闇ある夏の月 矢野 細野 横山 加藤 栗原 鈴木まんぼう 森井美惠子 雄治 忠男 法子 正子 郁子 一敏 栞

> 朱夏ならばふと縦いてゆく引き潮に 青天や昨日に耽けている蜥蜴 不要不急山桃は実を持て余し 孑孑の子規の襷を受ける虚子 養生訓 雨の蓮やぎさん答弁釣瓶打ち 無為ならず図 [読みつつ冷酒を二、三杯 [書館深く梅 雨 石井紀美子 徳吉洋二 辻本喜代志 博臣 邑人

第一一九回 (令和三年七月二十二日) 司会 池田 博臣

手を握った感触君は青空 はたた神小さな家を恫喝す 蟬しきり廃止とありしバス路線 賑やかでもつとも寂し七月かな 雲の峰まだある意地と底力 紅花やおうなはいつも濡羽 たつきとは蒼き瘡蓋水狂言 大リーグ突如響もす片陰り 走り梅雨魚釣島へ潜水艦 鮎解禁渋谷新宿六本木 糸底の手ざわり真菰の馬に **蛸**壷から短形の箱へ移る鬱 薔薇の束にキュンとさされた誕生日 海月沈むアクリル板は日常 色 細野 山﨑 池田 並木 長濵 鈴木まんぼう 加賀谷秀男 石井紀美子 森井美惠子 徳吉洋二郎 正子 忠男 幸子 聰子 博臣 邑人 雄治 実 敏

### 柏 研 究 句 会 報

 $\bigcirc$ 四回 三年五月) 岡田

立夏の空ヘシャガールの馬借りる 少年の欲しい広い地と桜草 霾や風も助っ人ブラシの花 シンプルへ立ち返るとき風 夏来るインスタ映えの日本丸 悪態をつく鴉をりこどもの 引き返す遊船鳥は雲に入り 波の間に間にワクチン接種暮れかぬる 畳なはる月山の雲ほととぎす **六道の辻を灯せり蛇いちご** 休肝日四日目となり豆の花 山椒魚カオスの怖さ知っている 憲法記念日沖縄の海荒れて れていたり鎮魂歌 Ŧ. 月 長 下井 村 吉 佐野 藤 川 上 野口 中里 岡田 並木 橋本志津子 木之下みゆき 典子 寛

第一〇五回(令和三年六月)

更衣胸 石垣の砲弾跡や梅雨湿る さくらんぼつぎからつぎと女の児 茅の輪くぐる卒寿の人の赤マスク 煮え切れぬ男と女初鰹 鎮魂の合掌黴だらけの夕焼 蛍袋わが郷愁を呑みこみぬ 万葉びとのかくやさみどり薄衣 ・薬のどこまでも白い強情 元のまた衰へし 通信句会 担当 岡田 椎名 佐藤 吉野 岡田 髙橋 藤好 木之下みゆき 春 人 宗史 良

緑鳩同 短夜のこころの闇に手を延ばす この星に天網ありてメロン熟る 場の蟻迂回促す小さき 化すモニュメントの逆光 長井 下 橋本志津子

第一〇六回 信句会 (令 三年七 担当 月 畄  $\coprod$ 

丸茄子をさすって訃報確かむる荷風は銀座吾は手賀沼を梅雨晴間 梅雨最 囚はれのごとき日の暮れ半夏雨 花氷いのちしずかにしたたらす ポンポンダリア咲き飛翔する鷗 文系も宇宙飛行士浮いて来い ほどよき夏のすぐに眠くなる午後 自粛延々加速する老い心太 自惚れも生きる力よ紅 青鷺に瞑 破りの 中明日を奪う土石 二刀流現れ青嵐 | 想の水真っ平 打 鬼灯を買いにけり 心蓄薇 並木 佐藤 下村 川上 長井 髙橋 橋本志津子 木之下みゆき 洋子 邑人 春人 鈴子 典子 京子 鳳人 宗史 寬 結

## 君津研 究 句会報

兀 : 君津市生涯学習交流センター)

司 会 山田たかし

回 (令和三年五月六日)

代掻きの 丁寧に余生をたたむ花莚 蛇穴を出づ四 月雨や借りて重たき男傘 罪をは 田 み 一枚今空となる ||方山話聞きに行く 出す小鳥五月空 金澤 鈴木 泉 加藤 田たかし 志眞子

法子 惠子

気の笑顔

の裏に五月闇

孝子

ユニクロ

へ柄ステテコの めを生きて余命かな

女物

田沼美智子

七変化丘いっぱいの

お出迎え

クチン接種収束願う七変化

金澤 古賀

美幸

阿弥陀籤のいずれ残んの花降らん

青春をぽっと咲かせて月見草

五月 Ŧi. 月闇目玉うごめく地 一野をあははうふふのおほ ほ かな 村

母を見て父を見る子よ聖五 夏立てりごうごうと行く堰の 仏の巖に還る日永か な 水 小 越 富子

青天ヘフルスイングや五月来る

前田

孝子

月

徳吉洋二郎

囀りの一羽はだあれ樟大樹 五月の風TOTOのトイレ戸を叩く 笠森観音百八段の羽抜け鳥 敬礼する楡に送られ雁帰る 春の暮ひとりの畑に鍬を打 細野 並木 古賀 石井紀美子 孝子

壽昭 邑人 一敏

第十五 回 (令和三年六月三日) 長濵 聰子

どの山も膨む五月彩淡し

羽矢

眞人

香水 胸中の鏡が曇る太宰の忌 気が狂れる俳句三昧花は葉に 伏せしままの手鏡虎が涙雨 更衣古りて回らぬ万華鏡 五月の鏡 この星の 糸蜻蛉の音なき世界水鏡 モノクロの残像遠眼鏡の夏 い馳す人皆遠く蛍の夜 が 非 常階 |変身の倦怠期 いつも何処かで衣更 段下りてくる 轁 羽矢 小澤 田 山田たかし 加 石井紀美子 藤 沼美智子 濵 志眞子 孝子 眞人 一敏 富子 聰子 法子

短か夜の「どこまでも行こう」

亜星逝く

小澤 富子

文

AIの優しき誰何夏手套 言い分も胸に収めて落し

越野

幼子の問ひつぎつぎと花菖蒲 短夜の運行流水八十路か 桜蕊ふる山 頭 火の焚火あ な

三面鏡 和紙 花茨海へと続く小さき空 の夢五月披露の席次表 面暗く迎え梅雨

鈴木 金澤 古賀 越野

制服の形状 記憶梅は 実に

> 馬渕 吉野

津枝

美幸 精

徳吉洋二郎

第十六回

(令和三年七月

日

少し開 無器用に生き来て八十路新茶汲む 夕焼け小焼け海を引っ張り船帰る 収まらぬ身内の皮肉団扇風 雲の峰手中に収めケルン積む さびしさも清らに収め父の日来 五輪禍を如何に収拾する所存 日を弾き日を収めたり海は夏 懐に収めし文や蛍の夜 ふる里へ銀河鉄道待つ端居 生の収支を合わす籐寝椅 を壺 く貸し収納庫梅雨の蝶 に収めて遠花火 信句会 担当 石井紀美子 山田たかし 一敏 馬渕 並木 森 鈴木 村田 加 前藤 田 長濵 石井紀美子 志眞子 孝子 邑人 美幸

### ひ ろ ば

## 受賞 のお知らせ

## 第二十七回全国俳句コンクー 全国俳誌協会賞 ル

豆撒いて拾って平均的家族 星 郭 惠

# 一五四回野田俳句連盟春季文音俳句大会

を上回る規模の大会となった。 は一四五名、全員が選句に参加し盛会で昨年 句・結果発表という長い道程を経た。投句者 開催。コロナ禍により、昨年同様、 令和三年四月より五月に掛けて文音大会を (髙橋宗史記) 投句・選

【特別選者詠】 (二句の内一句のみ掲載)

北川昭久 (流山俳句協会会長)

石田きよし(柏俳句連盟会長) **箒目の乱れを糺す四月尽** 

八歳と傘寿の放つしゃぼん玉

実籾 風薫る聖火リレーの車椅子 繁(雑草主宰·野田俳句連盟顧問<u>]</u>

戸邉光一(野田俳句連盟顧問

マスク等しない仁王を怖れおり

敏 (軸主宰・野田俳句連盟会長)

茂り濃き山すそ街がせり上がる

## 【入賞者の一句】

①五線譜を沈めてみたき蝌蚪の群 (二句合点、○数字は順位、一句のみ掲載) ふく

## 【特選句】

⑩桜散りまた老人に戻りけり ⑨春光をまぶして朝のサラダかな ⑧ つくしんぼ生まれながらにある格差 ⑦蛇穴を出て瞬間接着剤匂ふ ⑥柿若葉日々平凡という非凡 ⑤走ること以外は知らず雪解川

松本八重子

北川昭久特選

遠方より田圃へ降りる春の 虹

孝江

石田きよし特選

晩春という哀歓のミルフィーユ Ш  $\Box$ 明

実籾

鬩ぎ合う山風川風野火走る 中川

戸邉光一特選

咲きほこるほどに桜が鬱になる 保坂 末子

敏特選

しずくを序曲囀りがはじまる樹 諸藤留美子

## 千葉県俳句作家協会 令和三年度新緑交流俳句 (文音俳句会)

りました。 ました。今年は昨年を上回る百名の参加があ 昨年に引き続き文音俳句会での開催となり (真木一九八号より転載

⑩白靴のはじめに触れしものは風 ⑨ 爽やかに土と向き合ふ余生かな

稗田

寿明

⑧若葉風鶏がころんと卵産む

中村

増田都美子

## (特選句)

万有を呑みこむごとし 能村研三会長特選 瀧の音

本池美佐子

京子

③八十路なほ紡ぐ夢あり青き踏む ②花の種蒔いて待つ事一つ増え

Ш 石 原

時効なき小さき嘘や豆の花

たんぽぽや脱線気味の 三枝かずを副会長特選 縄電車 豊島

増成栗人副会長特選

岡田

一夫 寛

金田めぐみ

静子

保坂

末子

菅ノ谷文子

蝶には蝶の花には花の謀 塩野谷 仁副会長特選

広上

あ

緑蔭にひらく植物図鑑かな

稗

田

寿明

いつどこで逸れし略図や夕雲雀 秋尾 敏理事長特選 高橋富久江

葉桜のトンネル通ふ風のいろ 合憲子副理事長特選

明子

加藤峰子事務局長特選 富川

シュートする底なき籠に緑さす 能美昌二郎

## 【入賞者の一句】

広子

③青空の奥の青空昭和の日 ⑦花は葉に敬語くづせぬ距離のまま ⑥しやぼん玉見えざるものに触れて爆ず ④天界の父と引き合ふ凧の糸 ②どこまでが北斎の青夏つばめ ⑤たんぽぽや脱線気味の縄電車 ①板の間は百年の艶柿若葉 (二句合計得点、 ○数字は順位、 谷本 細根 句のみ掲載) 藤岡 豊島 布施 鳥飼 徳吉洋二郎 貞夫 京子 成雄

### 掲 示 板

## 会員 会友異動≫

退会 逝去 (会員) (会員) 岡田信子、 日野葉子 精 伊、 相原 瀬尾教子 枝

新会員

小脇川村 幸 弘 子 碧 子 (会友) (会員) (会員) 山﨑幸子紹介安藤玲子紹介

## ■第二回幹事会

コロナ感染拡大防止の為、 第一回同様、 書面による幹事会を行った。 第二 回 第三回

令和三年度幹事会》

## 時 令和三年五月二十五日

令**題** 和 三 令和 |年度俳句大会 (事前投句の部) について 一年度総会・俳句大会中止の経緯

八七六五四三

三、令和三年度春の吟行会について五、会報一四一号について五、会報一四一号について五、会報一四一号について五、会報一四一号について五、会報一四一号について三、令和三年度春の吟行会について三、令和三年度春の吟行会について ②会員・会友動向 業務スケジュー ル

## |第三回幹事会

7

七六五四三二 時 令和三年八月二十四日(火)り、その他 ①会員・会友動向 他、その他 ①会員・会友動向 他

マスクをしないと、どうしたの?

と言われ

八十余年生きた歴史に遺る出来事で・・。

友人に会うと、コロナの予防注射はした?

## 《会員・ 会友の近況》

この 私は六十一歳なので私より若干若い人より 会は感染者が多く大変だなと思います。 て、人の多くいる所はためらわれます。 早く、ワクチンの接種の予約が出来ました。 なく菜園に力を入れています。(宇佐見房司) しています。それでも家居が多くなり例年に 手賀沼周辺 夏は千葉市や白子町へ出張が入ってい や大堀川近辺を極力歩くように 都

しっかり暮れてから外出しています。 しくなる自分を実感しながら。(横須賀洋子) 皆様のところでは如何でしょうか。 対面の句会も三密を避けて、 な生活に戻れることを願い、 ナ禍で休館もありましたが、 1、に短冊を認めました。 聞かせ頑張っています。 0 ボランテ 1 ア活動も十九年目。コロ 一日も早く平凡 ″さわやか広 徐々に開始。 自分の為と言 (岩岡 日々怪 方子) 國人

間

17

まもなく九十歳になります。 由ですが、 心は元気です。 眼も足も不自 (山崎 (池田 和人)

老々介護で俳句も儘なりません。(大見 コロナ以後、 等収穫していますが、ご近所の方に貰って頂 猛暑の中、早朝より茄子・胡瓜・ミニトマト では三十分の体操をしています。旅行に行 けなくただただ困っています。(大澤ひろみ) ける日が楽しみな昨今です。 日課に。二十分だったのが少しずつ増え今 遠出もままならず足腰体操が 充子) 節昌)

## ※現代俳句協会令和三年度会費 納められましたか?

費の原資となっています。 めにお納め願います。 会費の 部は、 千葉県現代俳句協会の まだの方は、 お 早 活動

### 事 務局 • 編集部だより

協力して一つ一つ成功させましょう。 事のあり方について、提言がありました。 トたちには大きな感動と勇気を貰いました。 中の東京五輪でしたが、ひたむきなアスリー 伝わってきました。また開催を危ぶまれる コロナに立ち向かう皆様方のご奮闘ぶり コロナ禍の中、 並木会長よりコロナ禍の今後の協会の行 様々な生活の工夫をされ、

## 現代俳句千葉 **令和三年九月一日発行** 第一四二号

発行人 千葉県現代俳句協会

木

邑

人

〒28-58 野田市野田代俳句千葉編集部

六七七-一-A二一五 木之下みゆき

〒26-54 千葉市稲毛区小仲台千葉県現代俳句協会事務局

七一八一二八一八 一六五八四十六五八四〇

0 ○四三一二五六一t